

# 高校一年の作文指導

— 自叙伝について —

高 瀬 允

わたくしの学校では国語科の作文計画の一つとして、一年生全員に自叙伝を書かせることにしている。夏の休暇の宿題として課し、その長さは大体原稿用紙30枚程度ときめてあるだけで特に細かい要求をつけていない。ここ数年の間にわたってつづけられており、その作品はもちろん国語の成績の一資料として、また生徒補導の立場からも利用されている。自叙伝を書くこと、及び書かれた自叙伝はいかなる意義をもっているかについて少しく感じたところを述べて見たいと思う。

## 1 課題としての自叙伝

国語科の作業である以上、当然作文力の養成、訓練でなければならぬ。高校一年生の学力から考えて、この場合書き易い素材について長文を書くという目標が考えられる。

現在の高校では授業時間を利用して長文を書くことは先ずないと言ってよい。せいぜいが800字程度のものであろう。国語教材にもなってくる感想文の長さにしてもそうである。長篇作文というものは極めて特殊な（文芸部員の如き）生徒が手がけるだけで大多数の生徒には無縁である。したがって全員に長文を課するという点には一つの得がたい訓練的意義がある。これに対して提出率が毎年殆ど9割をこえているところから見ると全般的に無理とはいえないようである。だがまた、楽に書いているかという点を決してそうではない。すなわち自叙伝につきまとう困難さが考えられなければならない。

- (1) 資料の整備
- (2) 記述方法の決定
- (3) 構成
- (4) 内容の取捨
- (5) 参考書などの影響
- (6) 思想の表現

以上あげたものは必ずしも困難点ではないが、これらのものが総合されて自叙伝を難しくしている点を見てよい。つまり満15才までの生徒達にとっては物心つくまでの年数は比率的には大きいとその間の事情は両親などにきかねばならない。作品に現われるこの時期の記述が著しく客観的であるのももっともであり、むしろこの時期が資料的に充実している。このことは父兄の協力が容易に得られることを示すものであり、他の面における教育的効果を考えてもよいであろう。但しそれらの資料がよく整理されていると見なし得るものは極めて少ない。精粗が均質でない。多くの場合前に精しく後に粗い。目立つのは高校入学時をもって結尾とすることである。枚数はそのへんでノルマに達するためでもあるまいが、高校三ヶ年は又、別なコースという意識もはたらき、にわかには筆をつけがたいのかもしれない。ところで大人の立場から考えた場合、この幼年期の記憶は当然薄い。それらはもし機会がなければ殆ど永久に記憶にのぼらないことである。その忘れ去らんとする記憶はこの自叙伝作成の折に少くとも鮮明によみがえ

っているの本校の生徒達であると言ってよい。その想起はまた当然懐旧の感情をともなう。したがってあらゆる作品を通じてリズムが勝り、すくなくとも共通して文学的である。

次に記述の具体的方法であるが、殆どの生徒が意識していないようである。内容にともなう文体、または文体の変化などに注意をはらうことがなく書きすすめられている。優秀なものはまれにしかない。具体例として書き出しの部分を見よう。

(イ) 私は年月日、日赤の産院で生まれました。母に聞くとこの日は三月とは言え小雪が散らついたとても寒い日だったそうです。

(ロ) 福井県一郡一町という辺鄙な所で私は一年月日、八人姉妹の末っ子という世にも希な境遇に生まれて来たのです。

(ハ) 昭和一年月日、一市一町に第一声をあげた。その翌年一郡一町の現在すんでいる家に移ったそうだ。

(ニ) 日本の敗戦三ヶ月前の一年月に私は石川県の河北潟の一角宇の気町大崎という所でうぶ声をあげた。

(ホ) 我々が、この世に生まれてきたら最後、必ず死ななければならない。わずかな短い人生にどれ程のことができようか。そんなことを考えたら、自分なんかつまらない一個の物体のように思えてくる。でもこの小さい物体にも、小さな歴史がある。この小さい歴史を自叙伝としてあらわすわけだ。これをかく自分でさえ、自叙伝とはどういうもので、どういう意義があるかわかないし、解決したという経験もちっともない。これをかいて何らかの意義があればとおもってかいてみた。

(ヘ) 春ともなれば標高 637 米の宝達山よりの清流が小川にまで注ぎ、間もなく螢のとび交う新緑の田園と変わり、そして焼けつく炎天の水遊びの楽しい季節を通りこして黄金の穂波につつまれ、紅葉の宝達山を仰ぎながら、寒い綿帽子に埋もりながら北国特有の長い冬眠に入るのである。これが私の生まれた押水の田舎の一角である。

(ト) 後四ヶ月、私がもはや満16才となるまでにはわずかの期間が残っているばかりです。この16年間をふりかえてみると、生まれてからずっと本当にいろいろの人と知り合い、そしていつの間にか成長してしまったようです。

以上の例のうち、(イ)(ロ)(ハ)のタイプが多く、(ホ)(ヘ)(ト)のごとく何らかの作意のあるものはすくないようである。(％で示せば40％前後かと思われる。)

全体の構成に対する配慮はどうであるか。多くの作品がこれについては相当に工夫をこらしているもののように見える。たとえば、類例の多いのは、幼年期、小学校時代、中学時代の三分法である。ただその際、各区分に対する枚数割当の意識はあまりないようであり、また各部分に精粗の差が目立つことは前述の通りである。これは内容の取捨選択の余裕がなかったことにも原因するであろう。

参考となるような書籍の影響の見られることがある。もっとも、自叙伝という課題を出されてあわてて読んだのでは、おそらく影響は構成などの面で形式的に一部あらわれるにすぎまいから、この場合の影響は普通作文と同じく、主として文体の面に見ることができる。例をあげれば、漱石の〔坊ちゃん〕のようなものがでてくるが極端なことはない。一般的に言って、現在の高校生は、こうした自伝文学の作品を読んでいる量は少なく、また作品の存在を知らない。国語の教科書では、必ず伝記、歴史文学がでてくるわけであるが、それらの作品に接する時は、すでに自己と遠い感じをいだいているのではないだろうか。

次に作品の思想表現という問題であるが、体験を通していただけに切実なものがあり、それは主として、教育に対する批判といった形であらわれている。例えば、一人っ子の言分は親が

あまりにも苦勞性で、男の子らしい遊びは一つもさせてくれなかったことに対して自分の子供は決してそのようには育てないというのであり、転校を重ねた子は、そのような父親の職業を非常に嫌う。またよくあらわれてくるものに、小学校の先生の批判がある。この場合、先生というものは、善悪の二種であって中間の存在はないようである。もちろん、人間的な面における接触を通じてえがかれ、ごくこまかい行動の一つ一つが作者に深い影響を与えている。

偶然なことに市内某小学校の先生が二人の生徒によって描かれ、それを読んでいるわたしがほぼその人間的印象をつかむことができるといったこともあった。

だが要するにそれらは作者である生徒達の今日的発言であることに間違はないのだ。そして当面の目標が、自己の体験をでていないかぎりにおいて思想性というものが確立しているとは見難い。このことは生徒自身も悩み、解決の途をもとめつつ書き進んだのでないかと思われる。

要するに、自叙伝の作成にはいろいろの困難点をとまなっている。長さの問題をはじめとする“なげき”が出題の時は一せいに生徒の口からもれるのであるが、実はこれは書き出して見れば何でもないのである。でき上った成果に対して少しく時をおいて反省してみるの方が重要であると思われるが、現状では事後処理は十分であるとは言えない。このことはよく検討して見なければならない。

## 2 自叙伝の思想的把握

本来自叙伝のもつ意義はどうなのであろうか。自己の赤裸々な告白でなければならないであろうか。殊に課題としての自叙伝には必ずその点をめぐってもやもやがぬぐい切れない。いわゆる生活綴り方ならばまだしも、発表意欲を持たぬものについて書かねばならぬ義務感は深刻なものがある。一クラスで約一割弱の未提出者の理由は多くそうした感情であるように見受けられ、理由を明言することができないのがむしろ気の毒である。一家の殆どの人間が登場してくる場合、それらの恥部をどう表現したら良いのか、高校一年生では、家庭内の内紛を大局から眺める目は持ち得ないから家族の中に悪人がいた場合、これはどうしても描きかねるのではないかと思われる。もちろん自己の悪徳も筆にたくないものの一つであろうが、それが自己の欠点ということになるとかなり冷静に眺めることができる。これはむしろ過去における事象として眺めているからかも知れない。いずれにせよ、自叙伝に発表すべきものと前提があることは一つの制限であって、真実を描く妨げであることは確かである。それをおして書かねばならぬ以上はある身構えが必然的に要求されることになる。その身構えがいわゆる八方破れであり、真に真実に貫かれているような場合は、大人の既成の作品においてすら類が少ないではないか。とすればそこに自己防衛の本能が目ざめたとしても異とするに足りない。たまたま自己の他に誇りうる何物かが見いだされると作者はそこに逃げ途を見つける。老年になっての回顧談がいかにかこの種の自慢にみたまされていることか。高校一年生にあって同じことは言えよう。それがつまり生い立ちの条件に左右される。必ずしも経済的な面とは限らないが、劣弱な面は回避して書かない。(また資料提供者たる両親の方から制約を加えられることもあるらしい。)従って結果的には古き良き時代への讚美、追想というロマンチズムが流行する。またそれは自伝文学の最も根本的な発想であろう。それでは、他の重要な要素であるべき自己反省の面はどうなっているか。前述の根本発想がいわば後向きのものであるとすれば、この自己反省は常に前向きでなければならないが、それは十分に意識されているだろうか。ここでは作者達の年令層が考慮に入れられる。すなわち彼等は現実に自身の発展を意識しているから、昨日のことは昨日のこととして割り切ることができるようである。それ故、自己自身の欠陥なら昨

日の非を改めるにやぶさかではない。常に現実を踏まえて立つ彼等の姿勢は明らかに示されている。こう考えてくると二律背反的性格を、彼等の場合、自叙伝は有している。回想のセンチメンタリズムに浸り切れる場合は資料的に苦悩し、前進の意欲に燃えた場合あらゆる可能性の故に、その取捨に迷うのが実情ではあるまいか。すると、自叙伝の作成は、いろいろな要素を適当に按配して、うまく構成することで妥協しなければならなくなる。その際、むろん虚構ということも考えられるが、もともと正直に年月日、どこそこに生れたと書きだした以上は、忽然として虚構が入り得る余地はあまりない。彼等はそこで〔詩と真実〕の問題にふれるわけである。これがもし私小説を少しくよんだ後であれば、もっと軽く書いてゆくのかも知れない。

長い年月をただちじめて見せよ、という要求がわたくし達にあるとすれば、それは作文の目標からはずれてしまうことになりかねない。自己を見つめる目と態度の養成を目的とするものであるとすれば、徒らに長たらしいものを要求する必要はない。すると、自叙伝を書く意義はややうすれてきてしまうのであるが、高校三ヶ年間における唯一の長文訓練である点では意義のないことではない。

### 3 指導と処理について

二学期最初に提出された 150部にのぼる自叙伝の処理は通読するだけでも容易ではない。従来、処理方法については国語科においてもはっきりしたものがなかったのであるが、最終的にはクラス主任が一年間保管し補導上の資料としている。これはあくまで利用の一面であって、はじめからのねらいではない。

評価という場合、形態的評価として、作品の体裁、記述の仕方、字の美醜、などももちろん考えられよう。とくに誤字の訂正は部分的でも必ず見つけて注意をうながすべきで、この種の作品では、同じ誤りが繰返してでてくる点からも大事なことである。又、最近、表紙をつけない原稿紙をとじただけのものがかなり提出されるようになった。事前に注意を与えておかないと、こうした形態的な面の粗雑さは増加するような傾向がある。

内容的評価としては、これを果して普通の作文並みの採点ができるかどうか大いに問題である。もちろん構成、表現、思想的な深み等と区別すれば可能であろうが、それでは全体の統一なものを見落とすおそれがある。作品全体を貫く精神的なあるもの、それはつまり作者の個性の発露なのであるが、それが表現されているかぎりにおいて、すべての作品は同一の次元にある。異なるところは演出の技術的巧拙だけである。とすれば、いわゆる評価は無理というべきであり、単に簡単な読後感をもって表現する方がすぐれているかもしれない。(本校では、評価に際しては普通の場合段階をつけていない。未提出者が減点されるというのが例である。) 国語の評価の問題は更に研究を要する問題である。そして私案では、むしろ、三年生頃になってから自己評価をさせて見るのが一法ではないかと思う。

細かい点に関して言えば、自叙伝を通読した場合、生徒の把握がより適確になることはたしかであり、生徒自身の方でも、自叙伝中の事件について話しかけると意外そうであり、また嬉しそうでもある。(多くの場合生徒の作品は両親に見せていない。それがクラス主任に読まれても左程に感じないのは面白い現象である。) 従って個人指導の面における利用度は大いにある。また国語的な面に関してだけでも、総合的な国語力が察知できる利点がある。要するに目下の所では、本校では厳密な処理法に到達していない。

先きのべた如く、一年生の時の作品を数年後に読み返す機会があるのは望ましいことである。以前に某女子大では矢張り、自叙伝の宿題を課し、本校の卒業生がたまたま、その時に高校時代のものを書き直していた例がある。この書き直しの際が得られるのは幸であり、せめ

て読み返す機会だけでも与えたいと思うのである。そしてその間には、国語学習活動として、ルソーなり、福沢諭吉なりの作品の読書体験が得られるであろうから。

#### 4 結 語

自叙伝についての以上の感想は、はなはだまとまりのないものになったが、わたくしの願いは次のことである。

自叙伝という形態を通じて高校生各自の自己認識を深めさせ、自己反省の機会を与えたい。かつまた、追想的発想からくる自然発生的な文芸性を伸ばしたい。かくて思想性と文芸の適当な調和の境地がまがりなりにまとめられれば、この時期を飾る一つの記念であることは間違いない。もし真に自己を暴露し人間性を描くような意図を持つとすれば、それはこの習作を種子として更に長年の育成をへて始めてみることになるのであろう。

1962.1.20